

報 告

短期大学生における「こうのとりのゆりかご」の
認識と意識に関する検討田崎 勝成¹⁾, 吉田 任子²⁾

〔論文要旨〕

短期大学生を対象に質問紙調査を行い、保育士養成課程に所属し、小児について専門的に学習する群と小児について専門的に学習しない群とに分け、「こうのとりのゆりかご」に関する認識や意識についての検討を行った。「こうのとりのゆりかご」の用語の認識や「こうのとりのゆりかご」の内容に関する正誤問題の正解数の合計点について、学習群と非学習群との間に有意な差が認められた。また、「こうのとりのゆりかご」に関する情報源について、テレビ、新聞、授業の項目について、学習群と非学習群との間に有意な差が認められた。一方、「こうのとりのゆりかご」について、今後増えると思うか、日本に必要なか、賛成か反対かという意識に関する質問については、学習群と非学習群との間に有意な差は認められなかった。

Key words : 「こうのとりのゆりかご」、認識、意識、短期大学生

I. 目 的

2007年5月、熊本市の慈恵病院が、匿名で新生児（実際は、幼児の事例もある）を預けられる設備である「こうのとりのゆりかご」（俗称、「赤ちゃんポスト」、以下特別な場合を除き、引用文献で「赤ちゃんポスト」と使用されている表現についても「こうのとりのゆりかご」と統一して表現する）を設置、運用を開始した¹⁻³⁾。

過去に国内では、1986年から5年半、群馬県前橋市内で、「天使の宿」という「こうのとりのゆりかご」と同様の施設が運営されていた。5年半の間で、20~30人の命が救われた。しかし、1992年2月、生後2~3週間の男児が凍死した状態で発見されたために閉鎖された⁴⁾。

なお、親の匿名性を担保した新生児の受け

入れシステムは、諸外国でも運用されている。2000年に設置されたドイツの「ベビークラッペ」を初めとして、イタリア、スイス、ハンガリー等のヨーロッパを中心として開設されている¹⁾。

ところで、日本において「こうのとりのゆりかご」を発案したのは慈恵病院の蓮田太二医師である^{1,5)}。蓮田が、「こうのとりのゆりかご」を発案した背景には、虐待による子殺し、あるいは生まれたばかりの新生児殺しが続発している世相がある。蓮田は地元である熊本で起きた3件の子どもの遺棄事件をきっかけとして、「こうのとりのゆりかご」の設置に踏み切っている¹⁾。なお、蓮田はドイツの「ベビークラッペ」を見本にして「こうのとりのゆりかご」を設置している^{1,6)}。

A Study on Perceptions and Attitudes of the 'Baby Hatch' in the Junior College Students

[2135]

Katsunari TASAKI, Toko YOSHIDA

受付 09. 4. 20

1) 岐阜聖徳学園大学短期大学部（研究職）

採用 09.10. 7

2) 岐阜大学医学部附属病院小児科（医師）

別刷請求先：田崎勝成 岐阜聖徳学園大学短期大学部 〒500-8288 岐阜県岐阜市中鶴1丁目38番地

Tel/Fax : 058-278-4165

しかしながら、その是非をめぐることは、さまざまな分野の関係者のみならず、一般市民を含めて論争が巻き起こった¹⁾。しかし阪本は、「是非」という言葉をあえて使えば、「是非ない」つまり「やむをえない」対策として、日本の社会には、「こうのとりのゆりかご」を必要とする者も生きており、その現実を無視して是非は語れないと述べている³⁾。また阪本は、「こうのとりのゆりかご」に預けられた子どもが成長したとき、「こうのとりのゆりかご」に預けられたという事実をどう受け止めるのか、彼らがそれを「悲劇」として受け止めないようにできるだけの社会的環境が、今の日本に十分あると言えるだろうかと問題視している³⁾。

今後、「こうのとりのゆりかご」に預けられた子どもたちが将来的に差別されたり、偏見をもたれることのないような世の中を構築していくためには、「こうのとりのゆりかご」に関する知識の普及や認識度の向上に努める必要があると考えられる。

そこで本研究では、短期大学生を対象とし、「こうのとりのゆりかご」に関する知識についてどのような手段を用いて情報を得ているのか、また、小児について専門的に学習するか否かによって、「こうのとりのゆりかご」についての認識や意識に相違が認められるかどうかという学習効果を明らかにすることにより、今後、「こうのとりのゆりかご」に関する差別や偏見が生じないような社会を形成するために必要な知識の普及や認識度の向上を図るための手段や方法を開発するための一助とすることを目的として検討を行った。

II. 研究方法

1. 調査対象および調査時期

岐阜県南部に位置する短期大学に所属する女子学生223名を対象とした。本研究では、小児について専門的に学ぶ保育士養成課程の学生群(学習群)と情報関係や栄養士養成課程に所属し、小児について専門的に学ばない学生群(非学習群)とに分類した。2008年10月上旬から11月下旬の間に調査用紙を配布し、無記名の自記式回答を求めた。

2. 調査内容

主な調査内容であるが、①「こうのとりのゆりかご」(赤ちゃんポスト)も括弧書きで表記、以下同様)という用語を知っているか、②何を通じて「こうのとりのゆりかご」という用語を聞いたことがあるのか、③「こうのとりのゆりかご」を日本で一番初めに設置したのはどこの都道府県か、④「こうのとりのゆりかご」に関する8つの質問、⑤「こうのとりのゆりかご」は今後増えると思うか、⑥「こうのとりのゆりかご」は日本に必要だと思うか、⑦「こうのとりのゆりかご」に賛成か反対かの項目である。

なお、質問項目⑥と⑦については、新聞社が過去に実施した同様の調査との比較のために設定した項目である^{7,8)}。また、今回の調査においては、すべての質問項目に対してすべて回答するように調査票を設計した。

研究の対象となった学生には、研究の趣旨と内容、またプライバシーの厳守と研究の目的以外には使用しないということを説明し、無記名での記入とした。同意が得られた学生より回答を得た。

3. 処理および分析方法

データの集計および分析にはExcel用の統計ソフトであるStatcel(オーエムエス社)を使用した。また、有意差の判定は、Student t検定、 χ^2 検定、Mann-Whitney U検定を用いて5%、1%および0.1%有意水準で行った。

III. 結果

1. 対象の背景

本調査の有効回答数は、189名であった。なお、各群の年齢を平均値±標準偏差で示すと、学習群が 19.2 ± 1.2 歳($n=99$)、非学習群が 18.9 ± 0.9 歳($n=90$)であり、学習群と非学習群に有意な差は認められなかった($t=1.690$)。

2. 「こうのとりのゆりかご」という用語を知っていますかについての項目

「こうのとりのゆりかご」という用語を知っていますかという問いについて、学習群では「はい」という回答が99名で100%($n=99$)であったのに対して、非学習群では81名で90.0%(n

=90)であった。一方、「いいえ」という回答は、学習群が0名で0%(n=99)、非学習群が9名で10.0%(n=90)であり、両群間に有意な差が認められた($\chi^2=10.40$, $p<0.01$)。

3. 何を通じて「こうのとりのゆりかご」を聞いたことがありますかについての項目

学習群、非学習群ともにテレビという回答が最も多く、学習群では93名で93.9%(n=99)、非学習群では76名で84.4%(n=90)であった(表1)。なお、両群の差を検討した結果、テレビ、新聞、授業の項目について有意な差が認められた(テレビ: $\chi^2=4.492$, $p<0.05$, 新聞: $\chi^2=5.903$, $p<0.05$, 授業: $\chi^2=14.85$, $p<0.001$)(表1)。

また、非学習群でも授業という回答が得られているが(表1)、高校の授業で聞いたという

表1 何を通じて「こうのとりのゆりかご」という用語を聞いたことがありますかについての項目

項目	学習群99名	非学習群90名	χ^2 値	検定
テレビ	93 (93.9)	76 (84.4)	4.492	*
インターネット	7 (7.1)	4 (4.4)	0.593	n.s.
雑誌	1 (1.0)	2 (2.2)	0.443	n.s.
マンガ本	0 (0.0)	0 (0.0)	—	n.s.
専門書	1 (1.0)	0 (0.0)	0.914	n.s.
新聞	26 (26.3)	11 (12.2)	5.903	*
授業	33 (33.3)	9 (10.0)	14.85	***
その他	0 (0.0)	0 (0.0)	—	n.s.

χ^2 検定 n.s.: 有意差なし * : $p<0.05$ *** : $p<0.001$
人数 (%) n=189

回答であった。

4. 「こうのとりのゆりかご」を最初に設置した都道府県についての項目

「こうのとりのゆりかご」を日本で一番初めに設置した都道府県は、熊本県である。正しい回答が得られた割合は、学習群では24名で24.2%(n=99)、非学習群では9名で10.0%(n=90)となった。一方、それ以外の回答は、学習群では75名で75.8%(n=99)、非学習群では81名で90.0%(n=90)であり、正しい回答、それ以外の回答と区別し、両群の差を検討した結果、有意な差が認められた($\chi^2=6.635$, $p<0.01$)。

5. 「こうのとりのゆりかご」に関する質問についての項目

「こうのとりのゆりかご」について、表2-1に示した8つの質問について、それぞれの内容に関する正誤問題の正答率を学習群と非学習群とで検討した結果、正答率が最も高かった質問項目は両群とも7の質問項目で、学習群では94名で94.9%(n=99)、非学習群では76名で84.4%(n=90)であった。また、両群の差を検討した結果、質問項目1, 3, 4, 7, 8について有意な差が認められた(質問項目1: $\chi^2=24.82$, $p<0.001$, 質問項目3: $\chi^2=14.00$, $p<0.001$, 質問項目4: $\chi^2=5.696$, $p<0.05$, 質問項目7: $\chi^2=5.754$, $p<0.05$, 質問項目8:

表2-1 「こうのとりのゆりかご」に関する8つの質問

質 問	正誤	正解数		χ^2 値	検定
		学習群 (99名)	非学習群 (90名)		
1. 日本には、「こうのとりのゆりかご」が5ヶ所ある。	×	73 (73.7)	34 (37.8)	24.82	***
2. 「こうのとりのゆりかご」は、匿名で預けられる。	○	88 (88.9)	75 (83.3)	1.226	n.s.
3. 日本で「こうのとりのゆりかご」は、1996年から開設された。	×	80 (80.8)	50 (55.6)	14.00	***
4. 「こうのとりのゆりかご」は児童福祉法で規定されている。	×	59 (59.6)	38 (42.2)	5.696	*
5. 「こうのとりのゆりかご」に子どもが預けられたということが確認された時点で、警察署、児童相談所、市役所等へ連絡される。	○	87 (87.9)	71 (78.9)	2.779	n.s.
6. 「こうのとりのゆりかご」には、新生児以外にも幼児が預けられたケースもある。	○	80 (80.8)	69 (76.7)	0.485	n.s.
7. 「こうのとりのゆりかご」に預けられた子どもは、医師によって健康チェックが行われる。	○	94 (94.9)	76 (84.4)	5.754	*
8. 「こうのとりのゆりかご」が発案された背景には、虐待による子殺し、あるいは生まれたばかりの新生児殺しが続発している世相がある。	○	88 (88.9)	69 (76.7)	5.007	*

χ^2 検定 n.s.: 有意差なし * : $p<0.05$ *** : $p<0.001$
人数 (%) n=189

表 2-2 「こうのとりのゆりかご」に関する質問についての項目

分類	人数	平均値±標準偏差 (点)	t 値	検定
学習群	99	6.6±1.2	6.119	***
非学習群	90	5.4±1.5		

Student t 検定 ***: $p < 0.001$ n = 189

$\chi^2 = 5.007$, $p < 0.05$ (表 2-1)。

次に各質問項目の正誤について、正解数1つにつき1点と換算し、その合計を算出した。その結果を平均値±標準偏差で示すと、学習群6.6±1.2点 (n=99)、非学習群5.4±1.5点 (n=90) となり、両群間に有意な差が認められた (t = 6.119, $p < 0.001$) (表 2-2)。

6. 「こうのとりのゆりかご」に関する意識についての項目

「こうのとりのゆりかご」が今後増えると思いますかという問いについて、「はい」という回答が学習群では72名で72.7% (n=99)、非学習群では58名で64.4% (n=90) であった。一方、「いいえ」という回答は学習群では27名で27.3% (n=99)、非学習群では32名で35.6% (n=90) であった。また、両群間に有意な差は認められなかった ($\chi^2 = 1.506$)。

次に、「こうのとりのゆりかご」は日本に必要だと思いますかという問いについては、両群とも「どちらともいえない」という回答が最も多く、学習群では49名で49.5% (n=99)、非学習群では28名で31.1% (n=90) であった (表 3)。なお、「必要」「どちらかという必要」の回答を合わせて、必要と思っている回答の割合を算出すると、学習群では43名で43.4% (n=99)、非学習群では42名で46.7% (n=90) であり、両群とも50%に達しなかった。また、両群間を比較したところ、有意な差は認められなかった (表 3)。

表 4 「こうのとりのゆりかご」に賛成か反対かについての項目

分類	人数	回答		χ^2 値	検定
		賛成	反対		
学習群	99	49 (49.5)	50 (50.5)	0.049	n.s.
非学習群	90	46 (51.1)	44 (48.9)		

χ^2 検定 n.s.: 有意差なし 人数 (%) n = 189

「こうのとりのゆりかご」に賛成か反対かの項目について、「賛成」という回答は、学習群では49名で49.5% (n=99)、非学習群では、46名で51.1% (n=90)、「反対」という回答は、学習群では50名で50.5% (n=99)、非学習群では44名で48.9% (n=90) となり、両群ともほぼ等しい結果が得られた (表 4)。また、両群の差について検討したところ、有意な差は認められなかった ($\chi^2 = 0.049$) (表 4)。

Ⅳ. 考 察

1. 「こうのとりのゆりかご」についての認識

「こうのとりのゆりかご」という用語を知っていますかという問いに対して、学習群と非学習群との間に有意な差が認められた。また、「こうのとりのゆりかご」を日本で最初に設置した都道府県に関する問いについての回答、「こうのとりのゆりかご」に関する8つの質問の正解数の合計点のいずれにおいても、両群間に有意な差が認められた。

これらの結果より、「こうのとりのゆりかご」に関して、学習群は非学習群よりもより認識度が高いということが考えられる。また、「こうのとりのゆりかご」に関する8つの質問の正答率について、それぞれの項目ごとに両群間の差を χ^2 値から判断すると、質問1, 3のような「こうのとりのゆりかご」の設置に関する質問については、両群間での差が認められやすいということが明らかとなった。したがって、「こうの

表 3 「こうのとりのゆりかご」は日本に必要だと思いますかについての項目

分類	人数	回答					検定
		不必要	どちらかという不必要	どちらともいえない	どちらかという必要	必要	
学習群	99	4 (4.0)	3 (3.0)	49 (49.5)	26 (26.3)	17 (17.2)	n.s.
非学習群	90	14 (15.6)	6 (6.7)	28 (31.1)	22 (24.4)	20 (22.2)	

Mann-Whitney U 検定 n.s.: 有意差なし 人数 (%) n = 189

とりのゆりかご」の設置に関する質問についてはより学習効果が現れやすいのではないかと考えられる。

2. 「こうのとりのゆりかご」を認識するための情報源

「こうのとりのゆりかご」の情報源については、テレビ、新聞、授業の項目において、学習群と非学習群との間に有意な差が認められた。ところで、先に田崎らは短期大学生を対象として、自閉症⁹⁾、ダウン症候群¹⁰⁾、心的外傷後ストレス障害¹¹⁾に関する認識度について、本研究と類似した検討を行っている。それらの結果では、自閉症、ダウン症候群、心的外傷後ストレス障害の認識については授業の項目のみに有意な差が認められたと報告している⁹⁻¹¹⁾。しかしながら、本研究では、先の疾患に関する認識調査とは異なり、授業の項目以外に、テレビや新聞の項目でも有意な差が認められた。

したがって、「こうのとりのゆりかご」の認識について、学習群が非学習群よりも高いという結果については、授業からの情報は重要であるが、それ以外にも、テレビや新聞からの情報によっても知識の定着や認識度の向上の効果が得られる可能性も考えられる。この点については、保育士養成課程学生と一般学生との間で、テレビ視聴時間、新聞閲読時間の相違があるかどうかという点も含めて、今後検討していく必要がある。

3. 「こうのとりのゆりかご」に関する意識

「こうのとりのゆりかご」が今後増えると思いますかという問いについては、学習群、非学習群とも「はい」という回答が60%を超えた。したがって、両群とも今後、「こうのとりのゆりかご」が増えていくであろうという意識があると考えられる。

また、「こうのとりのゆりかご」は日本に必要だと思いますかの問いについて、「必要」「どちらかという必要」という回答を合わせても、両群とも50%に達しなかった。

一方、「こうのとりのゆりかご」に賛成か反対かの問いについては、学習群、非学習群とも「賛成」、「反対」の割合がほぼ半数で等しい結果が得られた。

なお、本調査では「こうのとりのゆりかご」に賛成か反対かの問いについて「反対」と回答した人について、「こうのとりのゆりかご」は日本に必要なだと思いますかの問いの回答結果とクロス集計したところ、「どちらともいえない」、「どちらかという必要」、「不必要」の項目のいずれかに回答していた。

ところで、「アスパラクラブ」という朝日新聞の無料会員サービスに所属する会員のうち全国で約4,400人が「be モニター」として登録しており、その「be モニター」に対してインターネットを通じて、日本社会に必要なだと思いますかという調査を行っており、2007年6月2日の朝刊（be between）にその調査結果が公表された⁷⁾。その調査では、2,685名から回答が得られ、「必要」14%、「どちらかという必要」45%、「どちらともいえない」13%、「どちらかという必要」15%、「不必要」13%となり、「必要」・「どちらかという必要」という回答を合わせると50%を超えていた。これらの結果について、本調査とは、異なる結果が得られている。

さらに、2007年4月27日から4月29日の間に、goo リサーチのモニターから無作為で選んだ20歳以上を対象として、インターネットを利用して、賛否を問う調査が行われ、その結果が毎日新聞の2007年5月19日の朝刊に掲載された⁸⁾。なお、対象者の1,092名から回答が得られたが、その結果によれば、「賛成」が63%、「反対」が37%となり、本調査とは、明らかに異なる結果が得られている。

なお、本調査の結果とこれらのインターネットによる調査結果の相違について、本調査では、インターネットを通じて、「こうのとりのゆりかご」を認識した学生は、学習群では7.1%、非学習群では4.4%であることから、インターネットを情報源としている可能性は極めて低いということが考えられる。そのため、インターネットの調査に協力するような対象集団は、本調査の対象集団よりも、さまざまな社会問題について関心の高い集団であり、インターネットを通じて情報を得ており、調査結果に相違が生じたのではないかと推測される。

また、本調査の対象は、女子短期大学生である。一方、インターネットによる調査について

は、対象集団の世代もさまざまであり、性別についても区別されていない集団での結果である。したがって、対象集団の世代や性別によって、結果に相違が生じているのではないかと考えられる。

また、高野が社会福祉学部在籍する大学生269名を対象として、同様の検討を行っているが、「賛成」が63.2%、「反対」が36.1%、「その他」が0.7%という回答であり、本研究とは、異なる結果が得られている⁴⁾。しかし、高野の報告も対象者の性別は区別されておらず、性別により意識に差が生じるかどうかという点について、今後検討していく必要がある。なお、本調査では、「こうのとりのゆりかご」の意識に関する問いについては、いずれの調査項目とも、学習群と非学習群との間に有意な差が認められなかった。これらの結果と認識に関する結果を総合して考えると、保育士養成課程学生は、一般学生よりも「こうのとりのゆりかご」についての認識が高いと考えられるが、その認識の高さが、直接「こうのとりのゆりかご」の意識に関する調査結果に影響を与えていないと考えられる。しかしながら、この点については、本調査の調査対象である保育士養成課程の女子短期大学生に特異的に認められる結果なのか、それとも他の対象集団でも同様の結果が得られるのかどうかについては、今後詳細を検討する必要がある。

4. 「こうのとりのゆりかご」の背景について

「こうのとりのゆりかご」が発案された背景には、乳幼児虐待や嬰兒殺しが続発している世相がある。この点について、本研究では、「こうのとりのゆりかご」に関する8つの質問の質問項目8の結果から学習群と非学習群との間に有意な差が認められ、「こうのとりのゆりかご」の発案には、乳幼児虐待や嬰兒殺しが関係しているという知識を学習によって身につけていると考えられる。ところで、虐待に関しては、玉井らの学校教員を対象とした調査によると、教員の虐待に関する認識は十分なものではなく、その中でもネグレクトに関しては、幼稚園教諭の認識が最も低いことが指摘されている¹²⁾。したがって、「こうのとりのゆりかご」の設置と

関連のある虐待を防止するためにも、保育士養成課程における小児に関する専門的な学習は、非常に重要であると考えられる。

ところで、「こうのとりのゆりかご」に関して、2008年9月に一部発表された中間報告によると、17名のうち10名の身元が判明している¹³⁾。なお、子どもを「こうのとりのゆりかご」に預けた親について、「こうのとりのゆりかご」開設前の議論では10代の若い未婚女性の利用が多いだろうと予想された。ところが、実際は、10代は1割にとどまり、20代が3割、30、40代が6割である。利用時点での婚姻状況は、既婚者が6割、夫と死別または離婚した者が4割であった。また1人で子どもを預けに来たのは2割で、残る8割は夫が付き添っていたり、父母が代わりに来ている¹³⁾。また、蓮田医師は、「親が子どもを預ける背景には、出産が近くなり働けなくなったときに男性が姿を消す等、経済的、精神的にダメージを受けて、自分で育てる気持ちが打ち砕かれているケースが多い」と指摘している¹³⁾。なお、近年、母親のうつ病を原因とした母の子殺し、母子の心中、また子どもの虐待死が数多く報道されるようになっていく⁶⁾。したがって、子育て放棄の理由として母親のうつ病という可能性も考えられる。ところで、蓮田医師は家庭での子どもの教育および家庭内での人間関係が稀薄であること、学校での性教育がいのちの教育になっていない等の問題点を指摘している⁶⁾。したがって、これらの問題を解決し、子どもが生き生きと育つことのできる社会を形成するためにも、将来、保育者や親となっていく学生たちに対して十分な教育を行うこと、また、教育するための手段や方法を開発することは、非常に重要なことである。今後は、より効果的に教育を行えるように工夫していく必要性があると考えられる。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究の結果から、授業の受講以外にもテレビの視聴や新聞の閲読を通じて、「こうのとりのゆりかご」についての知識の定着や認識度が向上している可能性も否定できない。

しかしながら、本研究では、授業の受講の効果を含めて検討するために、調査を行った。そ

のため、授業を除いたテレビや新聞の情報源のみで保育士養成課程学生の認識度が向上したかどうかという点については、明確に明らかにすることができなかった。また、授業の受講により、テレビ視聴や新聞閲読が促進される可能性もある。しかし、本研究では質問紙の設計の点での限界があり、授業の受講とテレビ視聴、新聞閲読の相互作用や関連性について明らかにすることができなかった。

なお、課題として、本研究では、女子短期大学生を対象として調査を行っているため、今後は性別や世代間の相違による意識の相違等について明らかにするために、調査対象を拡大する必要があると考えられる。

また、「こうのとりのゆりかご」を利用して育っている子どもが現実存在しており、その子どもたちが、将来、安心して生活できるように、「こうのとりのゆりかご」についての社会的認識を高めるような対策を考えていかなければならない。

謝 辞

本研究を遂行するに当たって、協力して下さった岐阜聖徳学園大学短期大学部卒業生の市江紗規さん、在学生の吉田佳世さん、その他調査に協力して下さい下さった方々に深謝する。

文 献

- 1) 白石 拓. 医師の正義. 第1版. 東京:宝島社, 2008.
- 2) 松原康雄. 赤ちゃんポストが投げかけたこと(特集子どものいのちが輝くとき—子どものいのちと育ちを支える取り組みから). 世界の児童と母性 2008; 64: 36-39.
- 3) 阪本恭子. ドイツと日本における「赤ちゃんポスト」の現状と課題. 医学哲学医学倫理 2008; 26: 21-29.
- 4) 高野彩子. 赤ちゃんポストが問うもの. 立正社会福祉研究 2008; 9: 53-60.
- 5) 蓮田太二. 「赤ちゃんポスト」設置の決意—幼い命を守り抜くことが医者使命だ. Voice 2007; 355: 114-119.
- 6) 蓮田太二. 「こうのとりのゆりかご」(通称・赤ちゃんポスト)が示すもの(特集いのちの尊さを伝える). 教育と医学 2009; 57: 273-281.
- 7) 朝日新聞. 赤ちゃんポスト 必要ないのが理想だが^a(be between). 東京:朝日新聞社, 2007. 6. 2 朝刊: be 週末 b7.
- 8) 毎日新聞. ネット調査. 東京:毎日新聞社, 2007. 5. 19朝刊: 22.
- 9) 田崎勝成. 短期大学生における自閉症の認識度に関する検討. 小児保健研究 2007; 66: 709-713.
- 10) 田崎勝成, 和田節子. 短期大学生におけるダウン症候群の認識度に関する検討. 小児保健研究 2008; 67: 804-810.
- 11) 田崎勝成, 和田節子. 短期大学生における心的外傷後ストレス障害の認識に関する研究. 東海学校保健研究 2008; 32: 25-30.
- 12) 玉井邦夫(研究代表者). 児童虐待に関する学校の対応についての調査研究 平成14年度~15年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究促進費(1))(課題番号:14800005)研究成果報告書 2004.
- 13) 阪本恭子. その後の「赤ちゃんポスト」—未来の母と子の福祉のために—. 医療・生命と倫理・社会 2009; 8: 28-38.